

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

橋木俊詔 著

『日本の教育格差』

(2010年 岩波新書)

経済学者の視点で改革案を提言

著者は1998年の『日本の経済格差』によって、現在の格差論争の口火を切った経済学者である。世の中全体に漠然とした中流意識が漂っている最中に、いまや新たな格差が作られつつあると警告を発し、話題を集めた。これまでも教育格差について、多くの話題作を発表してきたが、その理由は経済格差が教育格差と密接に関係しているからである。今回のこの著書では最近報告されたデータを丹念に参照しながら、どのようにして教育格差が作り出されるのかを論じ、それをもとに著者としての改革案を提言している。

提言の一つを紹介すれば、かつては普通高校の卒業生には、事務職というポストがあったが、現代では事務職は大卒や短大卒で占められるようになり、普通高校の卒業者はゆき場所を失った。こういう時代になった以上、発想を変えて、普通科を少なくし、職業科を増やしたらどうかと提言している。また大学も文科系を削減し、理科系の定員を増加させるという提言をしている。傾聴に値する提言であろう。

子どもの意識の差が格差を作る

これまで経済学者は個人の獲得した学歴が、その後の所得や地位にどのような影響を与えるかに関心を注ぎ、本人の学力や意欲、家庭環境、学校環境などがどうやって学歴を決めるのかといった次元まで踏み込むことは少なかった。それは主に教育社会学者の領域で、著者がこの分野まで論を進めたところに、著者のこのテーマに対する深い思いが込められているのだろう。あるいは様々な仮説、言説だけが乱立する教育社会学に対する秘められた批判が含まれているのかもしれない。

例えば著者はこの本で、「文化資本」ではなく「学力資本」という言葉を使っている。今から40年ほど昔に登場した「文化資本」という言葉を、教育社会学者が



にその内容を疑うことなく利用しているが、この言葉が登場した当時の具体的な内容は、親子で古典文学を話題にすることがあるか、家に百科事典があるか、博物館、美術館に親子連れでゆくことがあるかどうかといった、その当時の高級文化との接触度を指す言葉だった。ところが40年もたてば古典文化の位置は変化し、接触のしかたも変化する。こうした時代変化を無視して、文化資本の中身が時

代を超えて同じであるかのような前提に立って議論することは危険で、認識を誤らせることになる。

それに対して著者は、子どもによって学力に対する関心が異なり、勉強に取り組む構えにも差があり、これが学力差を作るのだと説いている。言い換えればいくら親の学歴が高く、経済力があっても、子ども本人が学力を高める関心を持たず、勉強する構えが少なければ、学力は高まらない。ごく当たり前のことだが、これまで教育社会学者はあくまでも子どもの潜在的な能力はすべて同じで、家庭環境、学校環境、友人関係のなかで学力差が作られるという暗黙の前提に立ち、それを経験的なデータで証明することに精力を注いできた。

遺伝的要素も議論に取り入れるべき

あるシンポジウムの席上、著者が教育社会学者は学力差を説明する要因としてどうしてIQを使わないのかと質問を投じたところ、教育社会学者から猛烈な反発が起こったことがあった。たしかに教育社会学という学問分野は、生まれた時から環境決定論に立っており、遺伝説などともに天を抱くことのできない宿敵なのだろうが、最近の遺伝子研究の進歩をみたら、あるいは遺伝子もまた無視できなくなるのかもしれない。そうであれば、そこで仕方ないと諦めるのではなく、それを前提として、様々な社会的な教育上の施策や工夫を考える必要が出てくる。遺伝だからといって宿命論になる必要はなく、むしろ社会的工夫が必要になる。それが教育社会学の仕事であろう。